

- The Gift of Mercy and Forgiveness -
Pastoral Letter of Bishop

- いくつかの特別聖年に向けて -
「父のいくつかの恵みとゆるしの恵み」

(1) いくつかの聖年の意義

今、わたしたちの周りを見渡す時、社会は幸せにあふれているのでしょうか？世界各地で起こる気候変動の猛威、いたるところで起こる紛争、果てしないテロの応酬、生きるために難民となることを余儀なくされた人々、もうだれもコントロールできない状況にあります。国内に目を移した時、戦争準備が整えられ、経済最優先社会は格差を生み、経済メカニズムにわたしたちは縛られ、人の価値は役に立つときのみ、青年や子どもたちは夢を奪われ、なぜ生きなければならないのかと問いかけます。神が人間をお造りになった思いを振り返る時間さえ奪われています。人間の尊厳が忘れ去られつつある状況です。幸せに生きようと求めた政策にもかかわらず、あらぬ力によって希望の光が遠のいていくように思えてなりません。

・教皇様によって「いくつかの特別聖年」が公布されました。(2015.12.8～2016.11.20) この「特別聖年」に込められた教皇の思いを汲んでみましょう。20世紀において二つの大戦による悲劇を体験した世界に向けて、教会は語り掛ける必要を感じたのが第二バチカン公会議でした。神の子イエスのように人類に対する教会のメッセージは、「上からの視線」ではなく、同じ人間性を共有する者として語り掛けます。今年第二バチカン公会議が閉幕して50年です。「現代世界憲章の序文」は今日も響いています。『現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、とりわけ、貧しい人々とすべて苦しい人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、悲しみと苦しみでもある。真に人間的な事ながら、キリストの弟子たちの心の中に反響を呼び起さないようなものは一つもない。それ、かれらの共同体が人間によって構成されているからである・・・』ここで言われた、「真に人間的な事ながら」とは、一人ひとりの人間に起こる様々な事ながらのみならず、すべての人間に共通な人生の苦しみに寄り添いたいと願う教会の姿勢なのです。

・互いに慈しむ心を失い、砂漠で生活するような不毛で荒れた人生を送る現代人に寄り添う「神のいくつかの恵み」を告げ知らせる急務があるからです。わたしたちもこの聖なる一年を教皇様と心を合わせ、「神のいくつかの恵み」に出会うことができるよう、努めたいと思います。人類が神の慈しみに触れ、神の慈しみを共に生きるように回心に招かれていることを教皇様は強調されています。私たち教会は教皇様と心を合わせ、福音を告げ知らせ、証しする奉仕に励みたいと思います。『父よ、彼らを赦してください。何をしているか分っていないのです。』(ルカ23.34) 十字架上で私たちへの赦しのために、父に祈られたイエスさまのみ心とその愛を黙想し「いくつかの恵みと赦しの恵み」に生きる教会となるよう呼び掛けに答えたいと思います。

(2) 神のいくつかの恵みとゆるしの恵み

①神の赦しの恵みを黙想する目的は、神の慈しみをよりよく理解するためにあります。ともすれば私たちは地獄の恐れから恥ずかしくても勇気を出して告白場に行き、罪の赦しをいただき一安心する、というプロセスを体験していたのではないのでしょうか。しかし「神の慈しみ」である主の十字架を見つめていると、上記の過程とはまるで逆、神の赦しが先にあったことに気づくのです。

②傷ついた私たちは癒しと赦しを必要とします。・・・この世に生きる私たちは例外なく、苦しみと悲しみに包まれる経験を味わいます。その時、神の愛を疑い、見捨てようと思ってしまう。『わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。・・・わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。・・・わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則の虜にしているのが分かります。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。』(ロマ書7.15～)、神の慈しみに出会う前のパウロの嘆き、いや人類全体に及ぶ嘆きの声です。しかし、すべてにおいて神の慈しみと愛が先にあるという事実を私たちはイエスの十字架において知っているのです。

③神の無限の慈しみと愛が先にある。・・・イエスの「一万タラントンの譬え」(マタイ18.23～)を思い起こしてみよう。私たちはこの世での借金(ローン)を抱えることもあります。神からの借金はいかほどか?という思い巡らしてみたいのです。物心ついた時から身に覚えのある罪の意識です。たとえ話では主君の前に引き出され、借金の返済を迫られた家来がいます。「一万タラントンの借金を返せ」と迫られているのです。この家来こそ「わたし」なのです。『しかし、返済できなかったので、主君はこの家来に、自分も妻も子も、また持ち物も全部売って返済するように命じた。家来はひれ伏し、『どうか待ってください。きっと全部お返しします』としきりに願った。』(18.25～)とあります。この一万タラントンはいかなる金額なのでしょう。当時ブド一畑で働いた労働者の一日の賃金が1デナリオでした。因みに1タラントンは6000デナリオという金額です。すなわち1タラントンは6000日分の給料なのです。

しかしこの家来は1万タラントンの借金でした。なんと6000万日分の借金だったのです。1年は365日、10年が3650日、100才生きても36500日なのです。6000万日の借金とは天文学的数字であり、返済はまったく無理なのです。罪のあがないは人間には不可能なのです。『その家来の主君は憐れに思って、彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。』(18.27)「罪のゆるし」とはあくまでも神からの恵みであって、私たちの行いゆえではないというのです。まして私たちに赦される資格があるからではありません。

いわんや「私の祈りや善行」ゆえに救われているのではないのです。

『愛がわたしたちの内に全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます。・・・完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。』(一ヨハネの手紙4.17)

『わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようとして、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようとして、御心のままに前もってお定めになったのです。神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。』(エフェソ1.3~)

④ 罪のゆるし・・・くまなく愛し、全き愛をもって慈しまれる神は、常に赦しを用意してくださるので、再びパウロの言葉を聴きたいと思えます。『人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっています。ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。イエスを信じる者を義となさるためです。では、人の誇りはどこにあるのか。それは取り除かれました。どんな法則によってか。行いの法則によるのか。そうではない。信仰の法則によってです。なぜなら、わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。』(ロマ 3.22)

(3) 秘跡「赦しの恵み」にさいして・・・

① イエスのまなざし・・・神の子を十字架につけた人々、それを見つめる人々に対するイエスの思いは、このことばで表されます。『イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。』(ルカ23.34) すべてを捧げ尽くされた愛とゆるしの祈りです。嘆くようすもなく、罪を名指しすることも、また非難することも無く、私たちのために祈られるイエスです。神の子が十字架の極みまでのへりくだりにおいて、人々を見つめ『父よ、彼らをお赦しください。』と祈られる。『自分が何をしているのか知らないのです。』この赦しの祈りは「弁護者」の祈りです。私たちの罪を軽くし、私たちを孤立させず、私たちの味方として辱めず、赦すことにおいてご自分を高めない弁護者の祈りです。私たちが何をしているの分っていないときにも、神の赦し先があったのです。『何をしているのかわかっていない・・・』、真実とは何であるか、愛とは何であるかをイエスの瞳だけが知っておられるのです。『私たちがまだ罪ひとであったとき』(ロマ5.8)とパウロは無知であった時の自分の誇りを恥じています。『愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。』(一コリ13.4) 十字架のイエスのみ心に触れた私たちは驚きをもってその愛と慈しみを知るのです。

② 心の糾明・・・赦しの恵みの秘跡を前に私たちは糾明(心の振り返り)をいたします。しかし糾明は自分の心の反省から始めるのではないことを強調したいと思います。十字架のイエスを見つめることから始めるのです。過去の自分と今の自分を比べたり、他人と比べたりする時、比べる相手によって私の本当の姿は見えなくなり、自己弁解に陥るのです。比べるのはイエスの愛です。イエスの愛を見つめ続けることによって私たちは照らされるのです。そのとき自分が何者か分るのです。イエスの愛を知れば知るほど、自分が何者か分るのです。イエスを知らないとき、自分がどんな人間か分らないのです。糾明はイエスさまの慈しみである十字架を見つめ続けることから始まります。「主よその愛を私にください。」との祈りが始まるのです。赦しの恵みはわたしの浄化よりもキリストの愛を生きる恵みを祈り求めるのです。

③ 罪とは何か・・・私たちは罪の基準をどこに置いているのでしょうか。世間の常識が基準でしょうか。新聞などメディアの報道が基準なのでしょうか。それとも涙が出るときでしょうか。キリスト者にとって「生きる基準」が何であるのかを明確にすることによって、罪とは何かが見えてきます。パウロのように私たちも声を大にして言います。『わたしにとって、生きることはキリストである。』(フィリピ1.21) 「キリストの愛」を生きることがわたしたちの信仰生活です。「キリストの愛」を失った時、そこに「エゴの花」「差別、苦しみ、妬みetc.」罪の花が咲くのです。私たちに「罪とは愛の欠如」なのです。ゆえに「キリストの愛を取り戻すこと」が「赦しの恵み」の目的なのです。

④ 告白すること・・・イエスの愛を見失ったために「どんな罪の花」が咲いたかを言い表すことが重要なのではなく、イエスの問いかけ「何が望みか？」に答えたえることを大切にしたいと思います。「主よ、見えるようになりたいのです。」「歩けるようになりたいのです。」「あなたの愛で満たしていただきたいのです。」「あなたの愛を見失ったわたし達の現実は・・・なのです」それは解放を求める「祈り」と癒しの祈りであり、神の慈しみに満たされた出会いの場となるのです。そのときイエスが私の現実而降り下り、傍らで祈っておられるのです。

⑤ 「そろばん告解」と「洗濯告解」は自己満足と幻滅に陥る・・・罪の花が何度咲いたか「回数」を言いなさい、と教わりました。その度ごとに前回と今回の数を比べ、今回は少々「進歩した」のかどうか考えました。本当はチャンスが無かったから花が咲かなかった・・・だけなのかもしれません。チャンスがあれば罪の花をいっぱい咲かせる私たちではないでしょうか。罪の数を数えることに意味があるように思えません。時にそれは自己弁護や優越の機会となるかも知れません。また、心の浄化を願い、「心の洗濯」とも習いました。しかし洗えば洗うほど神経質になり、遂に「洗うこと」に疲れてしまいました。さらに二度と罪を犯さない「決心」をするように指導されました。これらの経験は自己満足から、ついに自分の幻滅へと陥ってしまうことになりかねなかったのです。いつの間にか神の愛を

忘れてしまい、自己満足感を充たす信心業となってしまうのではないのでしょうか。「キリストに照らされることから始まり、キリストの愛に満たされ、神への感謝に終わる」のが赦しの恵みなのです。聖霊に満たされていく中でわたしたちは変えられていくのです。主体はわたしではなく聖霊なのです。

パウロの言葉を噛みしめましょう。『しかし、主の方に向き直れば、覆いは取り去られます。ここでいう主とは、“霊”のことですが、主の霊のおられるところに自由があります。わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造り変えられていきます。これは主の霊の働きによることです。』（二コリント3.18）

⑥共同回心式は祭司職と預言職を生きる教会の姿・・・私たちは洗礼、堅信の秘跡において、「キリストの油（聖香油）」を塗油されました。この油を注がれた私たちはキリストの使命に生きる「キリストの体」となったのです。キリストの使命とは「祭司職・預言職・王職」です。（因みに）「王職」は人々の幸せのために奉仕する使命であって、権力者の意味ではありません）ここで「赦しの恵みと祭司職」について考えてみたいと思います。人々の祈りを神に捧げ、神の慈しみを人々に与える、それが祭司職であり、イエスは永遠の祭司であることが分ります。洗礼においてキリストの使命に呼ばれた私たちは「信徒の共通祭司職＊」を生きるのです。わたしたちは「個人の赦し」のみならず十字架上のイエスと共に「人類への赦し」を祈る祭司なのです。教会が祭司であることを意識しない時「主の祈り」における、『わたしたちの・・・』が見えていないのです。「共同回心式」は教会共同体が祭司職を意識し、イエスの愛を生きるためにあるのです。また「共同回心式」は教会共同体がイエスの眼差しをもって社会の現実において「正義と愛」を指し示す「預言者」であることを意識します。「罪の連帯」によって生き辛い社会の中で、「現代世界憲章の序文」にあるように、教会がこの社会に寄り添い生きるとき、預言者として「人類連帯の罪」に痛みを覚え、祭司としてその罪を神に告白し赦しを祈り願うのです。教会はこれまであまりにも内向きな「自分の罪」にのみ目を向けるよう指導してきたのではないのでしょうか。第二バチカン公会議から50年経った今、その精神に気づき、多くの人々の「隣人となり」十字架上の主と共に慈しみを生きる教会として生きていこうではありませんか。

＊（秘跡執行のための叙階による位階的役務的祭司職とは別です。）

⑦「償いの祈り」によって赦しが与えられるのではない。・・・赦しの秘跡のあと、司祭は「償いの祈り」を捧げるようにと告げることがあります。それはむしろ「感謝の祈り」「キリストの愛に向かう祈り」であってほしいと思います。「償いの祈り」を果たしたことによって赦しが与えられた、と取引のような信仰に陥らないことを切に願います。罪の償いは「イエスさまの十字架のあがない」です。救いが全うされるということは、神の業であるからです。『こうして、神は、キリスト・イエスにおいてわたしたちにお示しになった慈しみにより、その限りなく豊かな恵みを、来るべき世に現そうとされたのです。事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。それは、だれも誇ることもないためなのです。』（エフェソ2.8～9）わたしたちができることは感謝と賛美の祈りではないでしょうか。

（4）現実の社会において福音を生きる教会

現代の危機を乗り越えるために、人類全体が共通善を求める生き方が不可欠となります。そうでなければもはや人類は存続しえなくなります。一人ひとりの幸せのために、個人或いは国が愛をもって奉仕する生き方が必要とされるのです。全てのキリスト者がより熱心に確信を持って神の慈しみを表す生き方（交わりと証し）の信仰が求められます。「わたしは道であり、真理であり、命である」（ヨハネ14.6）ことを福音において確信しているわたしたちです。人々への愛と赦しの奉仕、正義と平和への奉仕が人類存続の条件となることをわたしたちは確信しているのです。人間の自然的常識を超えた福音の招きはわたしたちを教会にしてくれるのです。

従って、わたしたち教会は周りの人々の幸せのためにどのような奉仕ができるのでしょうか。教会もいろいろな困難に直面しながらも、神の民が集まるための場所を預かっています。小教区の建物は週日の昼間は空いていることがあります。東日本大震災でも、阪神淡路大震災でも教会の施設は近隣の方々の「憩いの場、お茶っこの場」「学童の補習」「健康相談の場」「朝ご飯と一緒にする場」「趣味の会の場・・・」「本当のことを聴き合う会」「ボランティアのミーティング場」「弱くされた方々のシェルター」・・・として開かれてきました。教会が信者のためだけにあるということではないのです。地域の人々の命と愛のために、そのニードを見つけることが福音宣教の始まりではないのでしょうか。一つの教会だけではなく、地区・ブロックの教会が工夫しながら一緒に奉仕する。このように地域に繋がっていく教会が、これからはもっと必要となるのではないのでしょうか。場の提供、重宝がられる教会が「新しい福音宣教」となっていくのではないのでしょうか。この現実の中に「福音のマーケット」は多様にあるのではないのでしょうか。地区・ブロックが置かれている地域の現実を見渡してみてください。愛と命をはぐくむ共同体が存在した時「立派な建物はなくなったが、本当の教会は残った」と「神のいつくしみ」に触れ、共に感謝と喜びが分かち合われる教会となれますように。主の照らしと祝福をお祈り申し上げます。

2012年12月8日 「いつくしみの特別聖年 開始の日」

高松教区司教 使徒ヨハネ 諏訪 榮治郎

